アートの力をまちに取り込み 誰もが文化芸術を楽しめる地域に

臥雲 義尚（がうん よしなお）
松本市長（長野県）

小山田 久（おやまだ ひさし）
十和田市長（青森県）

司会・コーディネーター
細川 珠生（ほそかわ たまお）
政治ジャーナリスト

大森 雅夫（おおもり まさお）
岡山市長（岡山県）

藤井 信吾（ふじい しんご）
取手市長（茨城県）

以前から彫刻などの芸術作品をまちなかに設置する「パブリックアート」の取り組みが各地で進められてきましたが、近年は住民交流の促進や地域活性化などを目的に、現代アートなどの作品を一定期間、野外に展示し、人々の地域周遊を促す「屋外芸術祭」も盛んに開催されるようになりました。また、地域の文化施設を中心に、市民の文化芸術活動を支援したり、アートの魅力を多くの市民に体験してもらうワークショップを開催するなど、市民の文化意識の醸成に向けたアウトリーチ活動も精力的に行われています。

座談会では、まちの魅力向上に向け、アートの力を生かした諸施策を進める小山田・十和田市長、臥雲・松本市長、藤井・取手市長、大森・岡山市長にお集まりいただき、具体的な取り組み内容、市民の理解促進の重要性、アートがもたらす経済効果などについて語っていただきました。

（本文中の役職名・敬称は一部省略しています）

※新型コロナウイルス感染症の感染防止に配慮し開催しています

各地で進められる アートを活用したまちづくり

細川　地域の個性や魅力を発信し、クリエーティブな人材を地域に引き付ける手段として、アートを活用したまちづくりが近年、各地で活発に進められています。それでは、各都市における取り組み内容についてお聞かせください。

通り全体を一つの美術館に見立て多様な現代アートの作品を展開する「Arts Towada」を推進してきました。

小山田 久
十和田市長（青森県）

小山田　十和田市の市庁舎前には、「官庁街通り」と呼ばれる、長さ1・1㎞に及ぶ桜と松の並木道があります。「日本の道・100選」や「新日本100景」にも選ばれた、本市の中心市街地のシンボルロードです。通り沿いには、市庁舎以外にも、国・県・市の各種施設が並んでいますが、合同庁舎整備に伴う出先機関の転居などにより、20年ほど前には空き地も目立つようになっていました。そこで十和田市ではより魅力的で美しい官庁街通りの景観を造り出すとともに、未来へ向けた新しいまちづくりとして、平成17年に「野外芸術文化ゾーン基本計画」を策定。通り全体を一つの美術館に見立て、多様な現代アートの作品を展開するプロジェクト「Arts Towada」に取り組むことになりました。

平成20年にはその拠点施設として、「十和田市現代美術館」（以下、現代美術館）を開設し、その向かいの空き地には屋外作品を展示する「アート広場」を設けました。また、通りに沿ってストリートファニチャーの設置も進め、平成22年にグランドオープンしました。国内外の有名アーティストが手がけた作品を長期展示するスタイルを特徴としており、現在、館内では27作品、アート広場では7作品を常設展示しています。例年、本市の人口のおよそ2倍となる約15万人が現代美術館を訪れるなど、地域ににぎわいが生まれています。

臥雲　松本市の地域資源といえば、国宝松本城や山岳景勝地の上高地（かみこうち）が有名ですが、文化芸術も有力な資源です。特に音楽が盛んな「楽都」で、世界的な指揮者である小澤征爾氏を総監督とした「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」の開催地として、市民をはじめ、全国の皆さんに至高の音楽を提供してきました。また、美術分野でも「松本市美術館」において、松本市出身の世界的アーティストである草間彌生氏の作品を常設展示するなどしています。

さらに、老若男女の市民キャストが歌舞伎俳優と共演する「信州・まつもと大歌舞伎」や、まちなかを回遊しながら、さまざまな大道芸人のパフォーマンスを楽しむ「まつもと街なか大道芸」、合唱団もオーケストラも市民が担う「まつもと市民オペラ」など、多数の市民を巻きこんだ、多様な文化芸術活動も展開してきました。加えて、市民団体によるアート活動も活発です。中でも、さまざまなジャンルの工芸作家が出展する野外クラフトイベント「クラフト

中心市街地のシンボルロード「官庁街通り」沿いに整備された十和田市現代美術館（十和田市）

文化施設の整備後もソフトやコンテンツを充実させて継続的に市民の共感を生み出していくことが重要です。

臥雲 義尚
松本市長（長野県）

藤井　取手市では、平成3年の東京藝術大学取手校地の開設をきっかけに、同大学との交流を深めながら、「アートを身近に感じられるまちづくり」に取り組んできました。平成4年度には、市民の文化芸術への関心を高めることを目的として、「東京藝術大学卒業・修了作品展」の優れた作品に贈る「取手市長賞」を創設。受賞作品の数は60点となり、公共施設や公園など、市内各所で展示しています。これまで賞の対象は美術分野のみでしたが、令和元年度から新たに音楽分野も加えました。

市民が日常的にアートを感じられる環境づくりとして「壁画によるまちづくり」も長年にわたって推進しており、これまで制作された壁画作品は18点を数えます。昨年は取手市市制施行50周年式典に合わせて、取手市民会館の正面玄関に巨大壁画を制作したところ、市民にも大変喜んでいただきました。

さらに、平成11年からは本市と市民、東京藝術大学の三者共同による「取手アートプロジェクト」も推進。市内をフィールドとして、アーティストの活動支援と、市民が芸術体験・創造活動に関わる機会の創出に取り組んできました。また、令和元年には、産官学連携の下、取手駅の駅ビル内に、市民が気軽に作品を鑑賞したり、アートを体験できる文化交流施設「たいけん美じゅつ場」（VIVA）も開設しました。

大森　私たちが普段使う「観光」という言葉は、四書五経の『易経』に出てくる「観国之光」（国の光を観る）が語源といわれています。この「光」とは地域の風土や文化を指しますが、岡山市でも地域の光に磨きをかけようと、文化芸術の振興に力を入れてきました。

その取り組みの一つが、中心市街地の岡山城・後楽園周辺エリアを会場に、平成28年から3年ごとに実施している「岡山芸術交流」です。国際的にも高い評価を得ている現代美術の国際展で、今年の9月末から3回目が開催されます。コロナ禍の影響で、地域を見つめ直す動きが強まる中、今回は「子ども」と「地元」をキーワードに設定しました。現代アートは難解な点もありますが、子どもたちにはフレッシュな感性で作品を受け止め、アートの素晴らしさを感じ取ってもらいたいと考えています。

また、岡山市は、明治生まれの児童文学作家、坪田譲治の出身地でもあります。岡山市ではこの縁を生かして、優れた文学作品を表彰する「坪田譲治文学賞」を約40年にわたって運営するなど、市民と一体となって、文学による心豊かフェアまつもと」には、毎年、全国から多くの愛好家が訪れます。

また、日常生活の中で文化芸術に触れる機会を増やし、まちに魅力とにぎわいを創出させることを目的に、市内で行われているさまざまなアート活動を、一つのプラットフォームを通じて多くの人々に発信する「松本まちなかアートProject」にも取り組んでいます。

2005サイトウ・キネン・フェスティバル松本　©ほそがや博信

なまちづくりを推進してきました。そうした歴史を土台に、現在、「ユネスコ創造都市ネットワーク」の加盟運動も展開しています。

市民の理解・協力を促進する

細川　アートを活用した諸施策を進めるには、文化施設の整備など、一定の投資も必要になると思います。その点、市民の理解や協力が重要になると思いますが、いかがでしょうか。

臥雲　「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」や「信州・まつもと大歌舞伎」の主要会場である「まつもと市民芸術館」は、地域の文化芸術の拠点として平成16年に開館しましたが、建設時には反対運動が起きるなど、市民の間でも賛否両論がありました。今になってみると、あのような大きな投資をしたからこそ、質の高い大規模イベントを開催できているのも事実ですが、公共施設は整備後も維持管理や更新の費用もかかってきます。その意味では、いかにソフトやコンテンツを充実させて、継続的に市民の共感を生み出していけるかが重要になってくると思います。

　実際、松本市では多くの市民が地域に誇りを感じながら、各種イベントの運営サポートを含め、主体的に文化芸術活動に携わっています。今後は、その効果や広がりを市全体に波及させるため、アウトリーチ活動にも注力していきたいと考えています。

小山田　十和田市でも当初は市民の間に、現代美術館の建設に反対する声がありました。しかし、開館以来、まちを訪れる観光客が増え、活性化効果が生まれたことに加え、地道にワークショップなども実施した結果、市民の認識も変わってきました。

　今では多くの市民ボランティアが来館者向けの鑑賞サポート、清掃活動などを担われているほか、事業主の皆さんも店舗の一角を作品の展示スペースに提供されるなど、さまざまな形で現代美術館を盛り立ててくださっています。

大森　岡山市では、老朽化した「岡山市民会館」と「岡山市立市民文化ホール」に代わる新しい文化施設として、「岡山芸術創造劇場 ハレノワ」の整備を進めており、来年9月に開館予定です。

　市民と文化施設との関わりは、これまで作品や公演の鑑賞が中心でしたが、「ハレノワ」では、鑑賞機会の提供だけでなく、市民の創作活動を積極的に支援し、新たな文化芸術の創造につなげていきたいと考えています。幸い、この整備事業に対し、反対意見は聞こえてきませんが、新しい文化施設での積極的な活動を通して、市民一人一人の人生が豊かになり、文化に厚みが増してくれればうれしいですね。

藤井　長年にわたる東京藝術大学と連携したまちづくりの展開により、市民もさまざまなアートプロジェクトに意欲的にチャレンジされるようになりました。アーティストと市民が協働で大だこ揚げに取り組む「大空凧プロジェクト」は

東京藝術大学取手校地の開設をきっかけに「アートを身近に感じられるまちづくり」に取り組んできました。

藤井 信吾
取手市長（茨城県）

市制施行50周年式典に合わせて、取手市民会館の正面玄関に制作した巨大壁画（取手市）

来年開設の「岡山芸術創造劇場　ハレノワ」では鑑賞機会の提供に加えて市民の創作活動も積極的に支援します。

大森 雅夫
岡山市長（岡山県）

その一例です。参加した市民は地元で取れる材料を使い、アーティストと共に紙すきや染色なども行って、12畳相当の大だこを製作。その後、みんなで力を合わせて空に飛ばし、大いに盛り上がります。また、毎年行われる「取手ジャズフェスティバル」でも、市民の皆さんがアマチュアバンドを結成して、腕前を披露されています。

アートがもたらす経済効果

細川　アートは多くの人をまちに呼び込む観光資源でもあります。アートがもたらす活性化効果について、どのように考えられていらっしゃいますか。

大森　岡山市は中国・四国地方の結節点として、良好な交通アクセスに恵まれており、もともと大規模イベントを実施するのに適した地域です。しかも、「岡山芸術交流」は、瀬戸内の島々を主会場とする「瀬戸内国際芸術祭」と同時期に開催します。今回も相互連携を図ることで、より集客効果を高め、経済活性化に結び付けたいと考えています。

小山田　現代美術館を訪れる約15万人のうち、その約7割は県外からの観光客。市内で食事・宿泊をされる方が多く、地元経済も活気づいています。食事では、地元のソウルフードである「十和田バラ焼き」が特に人気が高いですね。

十和田市には奥入瀬渓流や十和田湖などの観光資源も豊富です。さらに、現代美術館は建築家の西沢立衛氏が設計されましたが、ほかにも市内の中心市街地には隈研吾氏による「十和田市民交流プラザ トワーレ」、安藤忠雄氏が手がけた「十和田市教育プラザ」など、世界的な建築家が設計した公共施設も開設されています。観光客には、地域全体の活性化に向けて、さまざまな観光資源や施設を巡ってもらいたいと考えています。

臥雲　観光客にいかにまちを回遊してもらうか、という点は非常に重要ですね。この点で、松本市内でも今注目されているのが建築物です。中心市街地には松本城以外にも、国宝の旧開智学校校舎や国登録有形文化財の旧第一勧業銀行松本支店など、名建築物が数多く集積しています。今年の1月には、エリア内に立地する19もの建築物にアート作品を展示する「マツモト建築芸術祭」を開催したところ、目標の3倍を超える延べ約6万5000人が来訪されました。

藤井　取手市をはじめ、JR常磐線沿線の自治体（我孫子市、柏市、松戸市、葛飾区、足立区、荒川区、台東区）と、JR東日本東京支社、東京藝術大学が連携して「JOBANアートライン協議会」を結成し、アートを基調とした沿線情報の共有と連携環境の整備に取り組んでいます。これまで沿線内外への情報発信力の強化と交流人口の拡大を目指して、アートイベントやワークショップを開いたり、プロモーションビデオを制作するなどしてきました。昨年も取手

展覧会に合わせ校庭を芝生化し、岡山芸術交流2022のタイトルを表した作品（岡山市）
©Okayama Art Summit2022

市内のパブリックアートを鑑賞しながら、歴史ある建物を巡る「駅からハイキング」という交流イベントを実施したところです。

アーティストの育成支援に向けて

細川　文化芸術の担い手であるアーティストの育成も行政の役割の一つだと思います。各市ではどのような取り組みを進めていらっしゃいますか。

藤井　取手市では、アーティスト支援の一環として、平成19年に市内の井野団地内の1棟（全7戸）を改装して、共同アトリエ「井野アーティストヴィレッジ」を整備しました。アーティストが思う存分創作に打ち込める活動拠点です。

　また、取手市には、新型コロナウイルス感染症の影響により活動や発表の機会を失ったアーティストや音楽家が少なくありません。そこで、一定の支援額を支給した上で、創作活動の様子や作品、インタビューなどを特別サイトで紹介する「アート創作活動拠点形成事業」など、各種支援策を講じています。

小山田　作品発表の機会を数多くつくることも、アーティスト支援につながります。十和田市では、この9月に開設する「十和田市地域交流センター（設計者：藤本壮介氏）」をはじめ、市内の公共施設などでも、これまで以上に作品展示を進め、多くの人が作品を目にする機会を積極的につくっていきたいと考えています。

細川 珠生
政治ジャーナリスト

大森　岡山市では、昭和37年に小学生から中・高校生までが活動する「桃太郎少年合唱団」を、昭和40年には自治体が運営する全国初の公立青少年オーケストラ「岡山市ジュニアオーケストラ」を設立するなど、長年にわたり子どもたちの育成支援を進めてきました。

　一方、プロのアーティストに対しては、創作や発表の機会を提供することが何よりも大切だと考えています。特に「ハレノワ」では、アーティストの皆さんには精力的に活動いただきたい。その姿が市民の芸術熱を高め、地域文化の裾野が広がることを期待しています。

臥雲　松本市は故鈴木鎮一が造り上げた音楽教育法「スズキ・メソード」の本拠地であり、毎年、夏には世界中の子どもたちを対象にした音楽教室が市内で行われています。また、「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」でも、県内の小学6年生や中学1年生に音楽会やオペラ鑑賞の機会を提供しています。

　一方で、松本市はにぎわいのあるまちなか空間を有していながら、豊かな自然も身近に堪能できる清涼感のあるまちです。アーティストが意欲的に創作活動を行える条件を備えていると思います。今後は子どもたちへの育成支援に加えて、多くのアーティストに「松本に居住して、創作活動をしたい」と思っていただけるような施策や地域づくりも進めたいですね。それこそが真のアーティスト支援であり、またクリエーティブ産業を市に根付かせる秘訣（ひけつ）だと考えています。

細川　コロナ禍は、地域の文化芸術活動にも大きな影響を及ぼした一方で、アートの重要性が再認識された面もあろうかと思います。今後も地域の文化行政を担う機関として、地域の魅力向上にアートを積極的に活用し、さまざまな主体と連携しながら、まちを挙げて文化芸術の振興に取り組んでいただきたいと願っています。本日はありがとうございました。

（令和4年7月13日、全国都市会館にて開催）

本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。